



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン (E-mail : daimao@travelmitra.jp)

ぼん子画

(570-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3 マツイ・ビル 201 TEL : 06-6354-3011

お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。(E-mail : daimao@travelmitra.jp)

「となりの宋さん」

『反日種族主義』李栄薫著（文芸春秋刊）がベスト・セラーだということで、読んでみた。わが輩がこの分野の本を開くのは珍しいことである。

“親日的”ともされる本が、韓国でベスト・セラーになったと聞いたので興味を持った。日本の嫌韓本ならまず読まない。

著者はソウル大学の元教授なので学問として問題を提起している。学問だから「正解」であるとは言えないので、その評価は読者諸氏にお任せする。

この本を読み終えたころ、「となりの宋さんの写真展」が生涯学習センターであった。宋神道さんは在日韓国人で、「慰安婦」被害を訴えた人であった。ジャーナリスト川田文子さんの講演日に合わせて出かけることにした。

演題は「裁判かけてすっかり垢抜けたババアになっちまった」、副題は、— 宋新道さんが受けた7年の軍性暴力と生涯 —

川田さんが語る宋さんの生涯は悲惨で、胸が痛くなるおもいであった。

なぜ、講演会にでかけたのか。

李先生の本には、なるほどと思った部分が散見していた。このなるほど感がしばし曲者となる。李先生と川田さんのポジションは、どうも違うようである。川田さんの話を失礼ながらシンパシー論とすると、学問とシンパシー論の二項対立になってしまう。わが輩の中で一元化、“中和”する必要を感じたからである。講演の中で、宋さんが一日70名の軍人の相手を強いられたという証言に川田さんは疑問を呈していた。李先生の本でもこの真偽は不明である。そう思えるような状況下に置かれていた、とわが輩は理解した。

この二項対立について、わが輩なりのまとめは後段に譲るとして、李先生の本で興味を示した項目があった。一度犯した罪は、時限なのか、無限なのか、という問題である。一般的には死ねばチャラになるが、韓国ではそうでもないらしい。

李先生によると、韓国が物質主義（拝金主義）なのは、シャーマニズムによるからだとしている。その集団を李先生は「種族」と定義づけている。種族以外の隣人を悪とみなす。

シャーマニズムには世界の善と悪を審判する絶対者、神は存在しない。また、あの世とこの世の境界線がない。死者の霊は不滅であるから、キリスト教のように神の審判を受けることがない。霊はこの世の空

中をさ迷うモノである。霊は「生者とは別の独立的人格として活動」する。

つまり幽霊となって、ときには息子でさえも脅かすのである。恨みをうけると、その恨みをもったまま浮遊することになる。幽霊は不滅なので「恨み」も不滅ということになる。

また、生存中に上位階級（両班）なら両班のまま、下位階級（奴婢）なら奴婢のまま幽霊としてさ迷うことになる。死ねばチャラにならない。だから、たとえ「嘘をついてでも」上位階級にならなければ、魂の救済がないのである。

朴槿恵前大統領が「加害者と被害者の立場は、千年過ぎても変わらない」と演説した意味が、これで分かったような気になった。一度犯した罪は、殆ど永遠なのである。

インド哲学ではどうなのか。

人が死ねば、カンジス河岸で火葬され、肉体は灰になる。ときには生に執着する生霊が肉体にとりつくこともあるので、燃え残った部分はガンジス河に流される。これでチャラになる。服（肉体）を着ていたアートマン（個我）は、服を脱ぎ捨てると“透明”になる。色も形も存在しない。恨みも苦しみもアートマンには存在しない。すべてがチャラである。

インド思想には「輪廻」があるので、再生するとき過去世のカルマ（業）の影響を受けることになる。しかし「恨み」が強調されることはない。むしろ「恨み」は放棄すべき対象である。人が生をうけた現世は、「恨み」を克服するための再チャレンジの場、アップ・グレイドの場としてある。

戦前は朝鮮人だけではなく日本人も売られた。

インドのタゴールやネルーと交流のあった高良とみ（1896-1993）という婦人運動家がいた。戦後売春防止法制定に尽力した政治家である。著書『非戦を生きる』に“からゆきさん”の話がでてくる。1935年（S. 10年）に、戦争を阻止するための案として、ガンディーを招聘して平和を説いてもらおうと考え、インドに出かけることにした。その船上で高等小学校をでたばかりの娘と親しくなった。島原の出身でシンガポールのおばさんの家へ遊びに行くと言った。それは“ホホワイト・スレイブ”（日奴隷、軍部が海外に日本の女の子を送り船員や商人の相手をさせる）だと分かり救い出した話である。あとで女衞ともめることになった。

天草の大久保美喜子さんは、小学生のときシンガポールの日本人墓地での体験がもとで“からゆきさん”を追い求めることになった。ムンバイにも出かけた。戦後も故郷に帰れない“からゆきさん”がいたからである。著書に『導かれて南の島へ』（海潮社）がある。

大場昇さんの『からゆきさん おキクの生涯』（明石書店）には、わが輩も登場しているのでご一読頂きたい。

わが輩の二項対立の解決は、いかにして可能か。それは講演の中で語られた宋さんのことばの中にあつた。

「戦争は国のためじゃなくて、自分のためにはいけない」

この言葉にすべてが含まれている。貧困も問題だが、戦争ほど悲惨な問題はない。恨みを掘り返すのではなく、宋さんのことばの共有こそ求められている。